

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 6月14日現在

機関番号：34301

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22520446

研究課題名（和文）元朝～明朝初期の言語接触に関する文献学的研究

研究課題名（英文）A philological study on language contact between Yuan dynasty and the beginning of Ming dynasty

研究代表者

渡部 洋（WATANABE HIROSHI）

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：40278429

研究成果の概要（和文）：元代から明代初期までの多言語史料（碑文 華夷訳語）を解読分析し、史料の1つ達魯花赤竹公神道碑銘の注釈書（「漢文・モンゴル文対訳 「達魯花赤竹君之碑」（1338年）訳注稿」2012 pp107-238）を『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』第29号に掲載した。

研究成果の概要（英文）：we studied on the linguistic influence of multilingual society through the systematic analysis of multilingual materials (inscription Huayiyiyu) between Yuan dynasty and the beginning of Ming dynasty, and then we put 「Sino-Mongolica 1. The Sino-Mongolian Inscription of 1338 in Memory of Jigünteï: Transcription, Translation and Commentaries」(2012 pp107-238) in 『ANNUAL MEMOIRS OF THE OTANI UNIVERSITY SHIN BUDDHIST COMPREHENSIVE RESEARCH INSTITUTE』 29.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：中国語学

## 1. 研究開始当初の背景

（1）13世紀に登場した元王朝は東アジアにおいて多種多様な民族の接触を活発にさせ独特な「多言語環境」を持つ社会を形成させた。この王朝の支配時期は100年ほどで長くはないが、それ以前の遼、金等の長く続いた北方民族の支配が当時中国北方に住む漢族の言葉、所謂「漢児言語」を生じさせ、それが元王朝時代の社会の中で共通語として使用されたようである。また、こうした多言語環境型の社会では「元典章」や「孝経直

解」等に見られる蒙文直訳体漢文や白話風漢文といった特殊な漢文も生じた。こうした「漢児言語」や特殊な漢文は漢人と異なる民族言語の契丹語やモンゴル語等の言語の影響を受けたであろうことは推察できるが、では当時の漢文や漢語はモンゴル語や契丹語にどのような影響をあたえたのであろうか。その点について詳しく研究された方はかなり少ないであろうと思う。そこでこの点を明らかにするために漢語や漢文、モンゴル語、ペルシャ語、チベット語各言語に精通した研

究者に参加を呼びかけこの研究が始まった。ただ、漢文とモンゴル語が併記されたバイリンガル史料の研究は近年あまり進んではいない。目にするのできる元代の碑文史料は多いが、それらの史料に対し言語面からの分析した研究はあまり行われていないのが実情である。過去にアメリカのモンゴル学者クリーヴス F.W.Cleaves が 1950 年に詳細な訳注を公表しているが、その後、半世紀が経過しているにもかかわらず、専門的研究は一切発表されていないのである。そこで我々はもう一度この方面で詳細な研究を行い、今後の碑文の研究や他のバイリンガル史料の研究にも役立てられるような基礎資料を作成すべきだと考えた。科研費を受ける前の 2009 年度に大谷大学真宗総合研究所より一年の一般研究費を受けてこの研究が始まり、翌年 2010 年からは科研費を受けて研究することができた。

2009 年度から月 2 回の研究会を行う一方、夏に中国へ行き碑文のあった現場の環境や実際の碑文の状況等についての調査を行うことでより一層この研究に意義のあることがわかった。なぜならば碑文のあった現場の環境は変化の度合いが日増しに大きくなっているようであり、また碑文への管理もあまり良いとはいえない。碑文の状態が良好でない場合、判別できない文字が増えて今後の碑文に関する研究に支障さえでてくる。2010 年度から科研費を受けることで関係資料の購入、遠地からくるメンバーの研究会参加、モンゴル国への調査等が可能となり幅広い研究活動ができる環境を整えていただいた。我々の研究にとってこれ以上ない支援で研究課題に取り組む我々の意識も無駄にはいけないというものになり、更に公に認められたことによって大きな自信となった。

## 2. 研究の目的

(1) 元朝期から明朝初期(13世紀~14世紀)にかけて漢人だけでは生じてこないような文体、所謂「蒙文直訳体漢文」や「白話風漢文体」等が現れる。また、元曲や全相平話等話し言葉で書かれた文獻にはモンゴル語の影響を受けたであろう文構造も見られる。以上のような文体や文構造が見られたのはやはり当時中国北方に住む漢人が長期にわたって異民族の支配を受けての事である。では、当時の漢人の言語と当時支配していたモンゴル人の言語と双方どのように影響しあっていたのか、この点に関してこれまで詳細に研究されていない。そしてこの双方の民族の言葉がどのように影響し合っていたかを解明することは元明期のような多言語社会の異民族間の言語接触の状況を明らかにすることにもなる。そこで漢文、或いは漢語とモンゴル語の両方で書かれた史料について

研究することで双方の言語の影響がどのようなものであったかを明らかにすることができる考え、合璧碑文や華夷訳語を研究対象にした。だが、碑文のようなバイリンガル史料の研究についてはあまり進んでいなく、1950 年代にアメリカのモンゴル学者クリーヴス F.W.Cleaves が詳細な訳注を公表して以来、約半世紀にわたってあまり詳細な研究は行われていない。そのため我々は元明期の多言語接触下の言語触状況を明らかにすることを最終目標にするが、元明期の基礎資料は量的にも質的にも不十分であるので、先に漢語とモンゴル語とが併記された多言語史料(蒙漢合璧 華夷訳語)を文献学的に研究し、当時の多言語接触下の言語接触状況を明らかにするための基礎資料を作成することにする。基礎資料の主なる内容は多言語史料の解読結果の提示、モンゴル語と漢語との比較対照による語彙や文構造に関する分析結果の提示、モンゴル語と他の言語(チベット語 ペルシャ語)との関係についての考察、史料解読による史実と時代背景の確認である。

## 3. 研究の方法

(1) 研究活動の柱の一つは史料解読である。毎月 2 回のペースで研究集会を行い、多言語史料(碑文 華夷訳語等)を解読する。この研究集会の参加者にはモンゴル語、中国語、ペルシャ語、契丹語、チベット語等の各言語に精通した研究者(松川節 古松崇志 小野浩 毛利英介 石野一晴 伴真一朗)に参加していただいているので多言語史料に異なった視点からの検討が可能となり、中国語、モンゴル語以外の諸言語との比較対照もできより客観的な分析もできた。具体的な方法としては碑文等の多言語史料のモンゴル文(パスパ文字)を現在のモンゴル語文の表記(キリル文字)に直し、漢文と比較対照しながら日本語に翻訳する。その後、研究者全員で漢文とモンゴル文との相違点について検討するという方法である。また、関係資料の収集や史料についての総合的な理解を深めるため中国やモンゴルに行き資料収集、博物館や遺跡の見学、各国の研究者との意見交換等を行った。

## 4. 研究成果

(1) 研究成果の一つはこれまでの研究活動によって下記の史料を読解したことである。

- 1 達魯花赤竹公神道碑銘
- 2 居庸關過街六体合璧造塔功德記
- 3 張氏先塋碑
- 4 勅賜興元閣碑
- 5 西寧王忻都公神道碑
- 6 少林寺聖旨碑
- 7 也可合敦大皇后懿旨并妃子懿旨碑

8 インスゲ紀功碑  
9 甲種本華夷訳語

上記の史料読解以外に碑文に関し東洋文庫に行き達魯花赤竹公神道碑銘と張氏先塋碑二つの拓本で文字を確認しそれぞれ不鮮明な文字の判別を行うことができた。また、『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』に訳注として掲載予定であった達魯花赤竹公神道碑銘の写真撮影を行うことができたので後のこの碑文の訳注の後ろに加えることができた。

これまでの研究集会により先に示した多言語史料の読解により予想以上に膨大なデータを蓄積することができたが、いかに効率よく整理するかが今後の課題として残った。ただ各メンバーの努力の結果、読解したものの中で「達魯花赤竹公神道碑銘」について整理しまとめ「漢文・モンゴル文対訳 「達魯花赤竹君之碑」(1338年) 訳注稿」のタイトル名で「大谷大学真宗総合研究所研究紀要」第29号に掲載し世に公表することができた。この「達魯花赤竹君之碑」(1338年) 訳注稿ではモンゴル文の転写と逐語訳、モンゴル文面の語注、漢文面の訓読・口語訳・語注等の項目が柱になっている。これまでこうした碑文の訳注は英文のもので日本語での訳注はなかったかと思う。語注では漢語、モンゴル語、ペルシャ語、チベット語等の各言語に精通した研究者が各自の知見を活かして書いており、他にはない特色をもっている。また、この訳注の後ろには東洋文庫で撮影した達魯花赤竹公神道碑銘の拓本の写真を見やすいように載せてあり、モンゴル文の文字や漢文の文字を簡単に確認できるようになっている。この訳注は恐らく元代の歴史的な研究や言語学的な研究にとって有用な資料になると思う。また、このような訳注を今後も学術書に掲載し今後の学術研究に提供するつもりである。ただ、まだ整理中のものが多く、今後、整理しまとめたものから発表する考えである。

(2) 多言語史料の読解による成果の他に2010年にモンゴル国へ行き碑文及び遺跡の調査を行った。その時の収穫はおおきいものがあつた。8月10日から8月17日の間A・オチル氏(モンゴル科学アカデミー歴史研究所所長)の案内でモンゴルの現存する石碑と石碑関係の遺跡を調査することができた。特別にモンゴル科学アカデミー考古研究所博物館に入館させていただき興元閣碑の一部や亀趺を見せていただいた。また、長年発掘現場で調査されてきたA・オチル氏から石碑発見後の調査方法や亀趺の役割について詳しく説明を受けた。碑文の文章を読解することを中心にやってきた我々にとって碑文の

書かれてある石碑の全体像を把握することができた。また、民族歴史博物館では興元閣碑のレプリカが展示してその大きさが実感でき不鮮明な文字の確認を行えた。その後首都ウランバートルから約380キロ離れたハラホリン市のエルデニゾー寺院内の石碑やホショーツァイダム博物館内のキョルテギンの石碑等の調査でそれぞれの石碑で文字配列の違いのあること、形状や大きさは様々であることがわかった。また、建設中のエルデニゾー寺院博物館近くに集められた展示用の石碑も特別に見ることができた。そこにはソグド語、契丹語等のモンゴル語以外の言語で刻まれた石碑があり、写真や撮影をさせていただいた。モンゴルの調査ではこうした石碑の調査以外にその石碑の建てられた時代背景についての見識をふかめるためにビルゲン遺跡、ハルバルガス遺跡、チントルゴイ遺跡、トゥニック遺跡等にも行きそれぞれの遺跡でA・オチル氏の詳しいレクチャーを受け各遺跡の重要性、騎馬民族の歴史、そして契丹族、ウイグル族、モンゴル族各民族の風俗習慣の違い等を知ることができた。

このモンゴル国の調査で我々は碑文が刻まれた石碑についての全体像をすることができ、更に写真やビデオ撮影等によりビジュアル的な資料も得ることができ今後の研究に大いに活かそうと思う。

(3) 研究会では史料の解読以外に国内或いは海外から多言語接触と関係する研究者を招いて講演をしていただいて我々の見識を深めた。特に2013年3月に中国社会科学院から来ていただいた聂鸿音氏と孙伯君氏の講演は我々の研究には大変示唆に富むお話しであった。明代に「西蕃訳語」は編纂されるが、こうした漢人と異民族とのコミュニケーション用の辞書の道具は古代からあり、その具体的な編纂過程は明らかではないが、聂氏、孙氏両氏の話によると皇帝から命じられた役人が各地に行き調査して編纂するのだが、ほとんどは現地に住む漢語もわかる役人が調査し編纂するというのであった。我々の解読した『甲種本 華夷訳語』の編纂過程は不明で今後我々の『甲種本 華夷訳語』の研究に大いに役立つものとなる。また、聂氏、孙氏両氏によると本研究代表者渡部の所属する大谷大学所蔵の『西蕃訳語』は表紙が黄色であるので清朝時代の乾隆帝に献じた正本である可能性が高いということであった。現在中国故宫博物館にあるのは表紙が青色で副本である。大谷所蔵の『西蕃訳語』は元は故神田喜一郎氏のものであったが、神田氏がどのようなルートで入手したのかは不明である。我々も入手ルートを含めこの『西蕃訳語』に見られるチベット文字や漢語等総合的な調査が必要であると感じた。今後の課題の1つとして取り組みたいと思う。

以上の三つ（(1) (2) (3)）が我々の研究の成果であるが、今後まずは目の前のデータを早急に整理し『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』「達魯花赤竹君之碑」（1338年）訳注稿のような形で我々の研究成果を公表していくつもりである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

渡部洋、松川節、古松崇志、小野浩、石野一晴、毛利英介、伴真一朗、清水奈都紀 漢文・モンゴル文対訳 「達魯花赤竹君之碑」（1338年）訳注稿、大谷大学真宗総合研究所研究紀要、査読無、第29号、2012、pp.107-238

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

渡部 洋 (WATANABE HIROSHI)

大谷大学・文学部・准教授

研究者番号：40278429

##### (2) 研究分担者

松川 節 (MATSUKAWA TAKASHI)

大谷大学・文学部・教授

研究者番号：60321064

古松 崇志 (FURUMATSU TAKASHI)

岡山大学・社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：90314278